

学習院女子大学主催シンポジウム「<やさしい日本語>と多文化共生」

講演「<やさしい日本語>に期待すること」

講演者：一橋大学国際教育センター 教授 庵 功雄 氏

<やさしい日本語>研究は、阪神・淡路大震災の際の外国人への情報提供から始まった。その後、非常時のみでなく平時の定住外国人への情報提供についても、あわせて研究・実践を進めており、その成果は横浜市との協働による公的文書の書き換えや、NHKの「NEWS WEB EASY」に取り入れられている。

さらに近年、言語的少数者に対する言語保障という側面へも考え方を拡大しており、例えば外国にルーツを持つ子どもや、障害、特にろうの子どもへの情報伝達研究などにも取り組んでいる。

<やさしい日本語>には2つの役割、すなわち「居場所づくりの<やさしい日本語>」「バイパスとしての<やさしい日本語>」という面がある。

外国人の日本定住に最も重要なことは、日本を居場所だと感じることだと思われる。そのために必要なのは、母語で言えることを日本語でも言えるようになることであろう。そのために最低限の文法項目を用いて早く言いたいことが表現できるようになるような方策が、「居場所づくりのための<やさしい日本語>」である。この中には「初期日本語教育の公的保証の対象としての<やさしい日本語>」(外国人が日本で生活する上で最低限必要な日本語教育の具体的な内容として)、「地域社会における共通言語としての<やさしい日本語>」(外国人が地域住民とコミュニケーションを取る手段として)、「『地域型初級』としての<やさしい日本語>」(地域日本語教室の特徴に即した日本語学習として)の3つの機能が含まれる。

「バイパスとしての<やさしい日本語>」は、外国にルーツを持つ子どもたちが日本で暮らしていくにあたって、言語による勉学の不利が生じず、できれば高校入学時、遅くとも高校卒業時までには、日本の子どもと同じスタートラインに着けるという目的で使う。日本語は難しいと言われているが、音声や文法は標準的なもので、学習上の問題点のかなりの部分は漢字に由来している。小学校で習得する漢字は約1,000字、常用漢字は約2,000字あり、しかも音読みと訓読みがある。一般の日本人が難しいと感じるアラビア文字も、文字数は28文字であり、それと比べると、漢字1,000字を覚えるのは相当にハードルが高いと想像できる。したがって、文法や漢字の教育方法(シラバス)を抜本的に見直して上級まで早く行けるようにと考えられたのが、「バイパスとしての<やさしい日本語>」である。

また、障害を持つ人達、例えばろう者の場合、日本手話は日本語とは全く別の体系を持った言語であり、ろう者にとっては日本手話が第一言語、日本語が第二言語である。したがって、ろう者に対する日本語教育も、一般の成人外国人に対する日本語教育と同様の方法論で行えることが、研究で明らかになりつつある。かつての日本は、(遣隋使・遣唐使といった当時のトップエリートでも)当時の口頭中国語は全く聞き取れなかったが、書記中国語(漢文)を通して、中国の文化や諸制度を理解し、今の日本社会の基礎を築いた。これと同様に、文字だけでも言語(日本語)を理解することは十分に可能であると考えられる。

加えて<やさしい日本語>は、外国人や障害者のためということだけでなく、伝える側にとっても、普段は特に意識していない会話を見直し、相手に何を伝えたいのか、何が伝わっていないかを改めて考えることで、コミュニケーション能力を高め、自分の日本語表現を映す「鏡」として機能すると考える。

(平成29年度作成)

問い合わせ先

「<やさしい日本語>と多文化共生」シンポジウム事務局
yasanichi.symposium@gmail.com

